

[鉄斎展によせて]

「寿山福海図」、「群仙祝寿図」をめぐって

大和文華館の所蔵する富岡鉄斎作品の内、四十七件が松山市三津浜の近藤家の旧蔵品です。同家の当主、文太郎氏は海運業を営む石崎家の番頭(後の石崎海運)を勤めていました。明治六年の二月に、鉄斎は石崎家を始めて訪れ、その後も明治八年、十九年、二十二年と訪問を重ねています。このような石崎家と鉄斎の交流を仲介したのが近藤文太郎氏です。近藤氏が歳暮に特産の海産物を贈り、鉄斎が返礼に書画を贈るといった親密な関係は、大正七年に文太郎氏が亡くなるまで、四十年以上にわたって続けられました。このようにして鉄斎が贈った作品には、鉄斎自筆の書簡が添えられ、作品が制作された経緯を知ることが出来ます。

「寿山福海図」、「群仙祝寿図」(図1、図2)の対幅作品も近藤家の旧蔵品です。近藤家の旧蔵品は贈答の返礼に描かれたせいか、紙本の水墨画が多いのですが、この作品は絹本に彩色が施されています。この作品にも、明治二十九年九月十一日付の書簡が附属しています。書簡には、前月三十日に近畿地方を水害が襲ったが、京都の被害はそれほどでもなかったことを報告し、その後、「過般高雁之拙筆絹本二葉密画落成致候」と記しています。「高雁」の意味が判然としませんが、「拙筆」と謙遜していますので、あるいは、音の通じる「厚顔」の意味でしょうか。この「絹本二葉密画」が「寿山福海図」、「群仙祝寿図」と思われます。「過般」という言葉から、贈答の返礼ではなく、以前から依頼を受けていたようです。文面は「猶々毎々御厚意二預り、種々御土産品御恵投二付、聊報酬之為大画仙紙之半折得意之画五枚進呈致候」と続き、この作品の他に、日頃の厚情に答えて、全紙を縦に二つに切った半折の大きさの作品を五枚贈

ることを約束しています。こちらは「得意之画」と自慢しており、この後にも、「紙本ハ頗得意之心得其中ニ相違可申暫時御待可被下候」と記していますので、紙本の作品には相当の自信を持っていたことがわかります。この書簡には、鉄斎の意外に社交的な側面が示されています。明治二十九年に、鉄斎は還暦を過ぎ、六十一才になっていましたが、この年の十二月には、京都の南画家とともに日本南画協会の創設に加わっており、画家として意欲的に活動していた時期にあたります。ちなみに、この年に東京では、岡倉天心を中心に結成された日本青年絵画協会が、横山大観らを加えて日本絵画協会と改称され、日本絵画に新しい動きが表れてきていました。

「寿山福海図」、「群仙祝寿図」では、ともに画題が画面左上に古代の神仙世界にふさわしく、篆書体に少し飄逸味を加えて記されています。画題の下に「鉄斎外史」と落款を記し、「百鍊」白文方印と「無倦」朱文方印を合わせた連印を捺しています。右幅の「寿山福海図」は、長寿を祝う言葉を元にして描かれた吉祥画です。中国明時代、太祖の宰相を務めた劉基は「寿山福海図」について、「在大海之中央、其不寿者八百歳、寿者乃與天地同久長」と記し、「寿山は大海の中央にあり、そこでは、それほど長生きでない者でも八百歳、長生きをする者は天地と同じくらの寿命がある」と伝え聞いていると述べています。「寿山福海図」という言葉の表す意味は、一般的に神秘的な長寿の岩島として定まっていますが、そこから描かれた絵画には、様々な表現が生まれています。海中に屹立する巖に蝙蝠が舞い飛ぶ光景を描いた作品でも、巖で寿山を寓意し、蝙蝠の「蝠」の字の音が「福」に通じることから、「寿山福海図」を象徴

的に表す場合があります。

鉄斎はこの画題を幸福感に満ちた山水図として描いています。海から豊かな恵みをもたらす波は、柔らかく大らかに岸に打ち寄せ、岸には岩島の入口のように洞があり、岩島の中腹に設けられた亭の中には、童子を伴う赤い服を着た老人が見えます。その亭の背後には瀧が落ち、棚引く水煙を追っていくと、幸福の象徴である金色の蝙蝠が飛んでいます。伝説の島を表現するために、中国唐時代の古様な青緑山水画の様式を採用しているのですが、茜色に染まる空と青山、緑青の濃い彩色を加えた岩島の色彩感、温かく柔らかな情緒を感じさせます。夢の島を描く子供のように、鉄斎は自ら画の中に入り込んで遊ぶように描いているのでしょう。画面からは楽しげな気分が伝わってきます。画中の赤い服を着た人物は、還暦を迎えた鉄斎自身かもしれません。このような絵画表現は「画遊」と呼ばれ、東洋絵画の伝統に見出せますが、

鉄斎はそこに自らの生活感情を強く反映させて、親愛の情をこめていきます。

左幅の「群仙祝寿図」も長寿を祝う吉祥画です。画面では八人の仙人が集まり、何かを待つように空を仰いでいます。この画題は海辺の光景に限りませんが、ここでは、「寿山福海図」との対の関係を考慮して、海に臨む岸の光景にしています。まるで、「寿山福海図」に描かれた岩島に近寄り、カメラでズームアップした光景のようです。背後には、やはり長寿を象徴する松が描かれています。仙人たちが待っているのは、画面右上の太陽に重ねて描かれた仙鶴に乗る寿老人です。まだかなり速く、仙人たちは気付いていません。寿老人も待たせることを心配して少し急いでいるように見えます。豪放な力強さに含まれた、この童画のような雅味やユーモアも鉄斎芸術の重要な特色に上げられます。

(中部義隆)

図1 群仙祝寿図



図2 寿山福海図

